

(地域・社会貢献研究)

都市への他出家族が人口減少地域の 維持存続に果たす役割の社会学的解明 —長野県下伊那郡天龍村役場との連携研究—

相川 陽 一* 丸山 真 央** 福島 万 紀***
Yoichi AIKAWA Masao MARUYAMA Maki FUKUSHIMA

研究実績の概要

【1. 研究目的と具体的な実施内容】

本研究の目的は、日本国内でも高齢化が極めて進行した自治体(市町村別の高齢化率で全国2位)である長野県下伊那郡天龍村をフィールドに、平成25年から培ってきた天龍村役場との連携関係に基づいて、複数の地域調査を同村役場と共同実施し、高齢化と人口減少が急激に進行する山村地域の構造把握と地域維持のための知見を得ることにある。研究成果は学会のみならず、調査地である天龍村に還元していく。

具体的には、1)小規模・高齢集落の全戸訪問調査、2)村役場職員への聞き取り調査、3)村出身者への質問紙調査(伝統的同郷団体と村役場場主導で結成に動き出した若手他出者団体等)、4)近隣都市の飯田市等での質問紙調査や聞き取り調査を実施する。これらの調査を3か年かけて村役場と共同実施し、高齢化と人口減少に直面する小規模自治体が、都市に他出した青年層とともに、空間をまたいで村を維持存続させていくための基礎データを得て、地域存続に向けた方策を構想していく。

【2. 研究意義と重要性】

既存の人口統計(国勢調査等)は世帯を調査単位として人々の動きを把握しようとする。だが、世帯を単位とした住民把握法は、農山村と都市に分かれて暮らす家族を世帯という単位で分断してしまう。都市に出た他出子たちと村に暮らす家族とのつながりが、統計上、不可視化されてしまうことで、実際には相互に支え合っている家族の実態を捉えることができなくなり、地

域社会の潜在力を見誤るおそれがある。

このような問題意識のもと、都市に暮らす他出子が、老親の見守り、買い物支援、農林業の支援等で頻繁に帰省している実態を正確に把握し、「家族は時間も空間も超えて存在する」という徳野貞雄氏らの提唱した仮説を検証し、知見を豊富化していく研究が、地域社会学や農村社会学等の研究で近年さかんに展開されている。

申請者らは、上記の仮説のみならず、帰郷する他出子を迎える側の老親の動向や意識にも着目し、オリジナルな仮説や論点を導出している。特に、他出子の役割を重視するだけでなく、他出子が帰還しやすい世帯と帰還しにくい世帯に着目し、帰還格差を生ぜしめている要因を掴む分析を行った。そして、他出子研究では、とすれば「他出子が定期帰還しているのだから公的な支援は縮小しても良い」という発想を研究者や行政担当者に抱かせてしまう新自由主義(ネオリベリズム)との「共振問題」も意識する必要がある。我々は、本段落に記した論点をふまえたうえで、学術研究としての水準を保持して天龍村の地域維持に貢献する研究を進めていく。

【3. 2017年度の実施経過と2018年度の実施見通し】

初年度の2017年度は、上半期に天龍村役場移住定住推進係と事前協議を行ったうえで、本項目【1.】に記した4つの調査のうち、1)、2)、3)に着手した。そして4)は、3)の発展型調査として着手した。以下、具体的な進捗状況と成果について記していく。

1)小規模・高齢集落の全戸訪問調査は、2017年

9月から3集落の全世帯調査を実施し、うち2集落を完了した。山間部は家々が離れており、調査完了には2018年度の実施を要する。

2) 村役場職員への聞き取り調査は、2017年8月に村役場の若手職員との座談会形式による聞き取り調査として実施した。

3) 村出身者への質問紙調査は、村役場の移住定住推進係より、多大なるサポートを受けて郵送調査を実施し、データ分析に着手した。具体的には、村役場より候補者(村中学校の卒業生で村外に居住する20歳から50歳までの人々)に質問紙調査の実施許可を得ていただき、許可を得た方々に、質問紙調査を郵送法で実施した。本格的なデータ分析は2018年度以降に実施したい。

4) 天龍村の近隣都市にあたる飯田市等での質問紙調査や聞き取り調査は、3) 村出身者への質問紙調査の発展型調査であり、郵送調査の対象者のうち10名から「インタビュー調査に応じて良い」との回答をいただき、うち2名へのインタビュー調査を完了し、2018年度以降には8名へのインタビュー調査を行う予定である。インタビュー調査の対象者から、同級生等の紹介についても前向きな意思が表明されており、調査対象者に新たな対象者を紹介いただくスノーボール法も検討したい。

1) から4) の調査は、いずれも円滑に進行しており、初年度の調査研究を順調に進行することができた。

【4. 2017年度の研究成果】

前項【3.】に記した調査に基づいて、初年度の調査成果を、①日本社会学会第90回大会における学術研究報告2本(11月)、②天龍村の文化祭における研究報告1本(11月)、③天龍村における現地報告会1回(2月)、④『日本農業新聞』への研究成果の寄稿記事1本(3月)として発表した。

2017年度の調査からは、他出子と出身村との関係についての先行研究にみられるように、出身村から程近い地方都市に多くの他出子が居住しており、近居する他出子による定期的な帰郷行事(生活サポートや自身のくつろぎ目的での帰郷)が確認された。これに加えて他出子の帰郷頻度には、世帯間でばらつきも確認され、実家の生活サポートを目的とした帰郷においても農地や林地の維持活動への関与は少数であり、他出子による生活サポート目的での帰郷については、その有効性と限界の双方を認識する必要があることが明らかになった。

【5. 2018年度の成果発表の中間報告】

二年目となる2018年度には、【3.】に記した各調査の未完了分および発展型の調査を進めながら、日本社会学会第91回大会において2本の研究報告を行った。

研究発表(平成29年度の研究成果)

(学会発表) 計(2)件

著者名	論文標題		
丸山真央・相川陽一・ 福島万紀	過疎農山村における他出家族の可能性と限界 —長野県下伊那郡天龍村における他出家族の調査から(1)—		
学会名	発表年月日	発表場所	
日本社会学会第90回大会	2017年11月4日	東京大学本郷キャンパス	
著者名	論文標題		
相川陽一・丸山真央・ 福島万紀	過疎農山村における「農」を通じた他出家族とのつながり —長野県下伊那郡天龍村における他出家族の調査から(2)—		
学会名	発表年月日	発表場所	
日本社会学会第90回大会	2017年11月4日	東京大学本郷キャンパス	

〔新聞(依頼記事・記名あり)〕 計(1)件

著者名	論文標題		
相川陽一	他出子がつなく都市と農山村 ー現場からの農村学:第89回ー		
掲載誌名	掲載年月日等	掲載面	
『日本農業新聞』	2018年3月25日 全国版	9面	

〔天龍村の文化祭における研究報告〕 計(1)件

著者名	論文標題		
丸山真央・相川陽一・ 福島万紀	「つながり」から考える山村再生		
掲載誌名	掲載年月日等	掲載面	
2017昇龍まつり (主催・天龍村役場)	2017年11月18日	—	

〔天龍村での調査報告会〕 計(1)件

著者名	論文標題		
相川陽一・丸山真央・ 福島万紀	「農山村と都市のつながりに関する調査(天龍中卒業生調査) :調査結果のあらまし(速報)」		
行事名等	発表年月日	発表場所	
2017年度 山村福祉研究会・南信班 成果報告会	2018年2月22日	天龍村高齢者福祉センター	

〔調査研究の報道 (新聞記事)〕 計(1)件

発表者名	記事標題		
—	地域潜在力を“見える化”若手職員実態把握 社会学者ら天龍村で		
掲載紙名	掲載年月日		
『南信州新聞』	2017年9月1日		

〔調査報告会の報道 (新聞記事)〕 計(2)件

発表者名	記事標題		
—	村民の知恵と力結集 天龍村2年に1度の昇龍まつり		
掲載紙名	掲載年月日		
『南信州新聞』	2017年11月22日		
発表者名	記事標題		
—	Uターンの予定ある? 社会学者らが研究報告 天龍村		
掲載紙名	掲載年月日		
『南信州新聞』	2018年2月25日		